

いま生活指導実践に必要なことは何か

藤本幹人

1. 生活指導とは何か

生活指導とは何だろうか。今回取り上げた竹内常一の論文の一つ「生活指導とは何か」から2つの定義を紹介し、全生研運動の出発点とも言える『学級集団づくり第二版』の第1章（城丸章夫執筆）から、その定義を拾い出すと、次のようなものになる。

①生活指導は「ひとりの人間的に生きてありたいという存在要求に応答して、その人が必要とし、要求している生活と生き方・在り方を共同してつくっていく営み」である。言い換えれば「人間の存在論的な基底が解体・崩壊しているただなかにあって『他者ととともに世界のなかにあり、他者と応答し合いつつ世界をつくり出していく』ということつまり人間と世界の全体性を再構成、再創造していくこと」である（『新・生活指導の理論』「終章 生活指導とは何か」2016年P254P259）。

②「『生活指導とは、子ども（たち）が意識的な生活主体として自分（たち）の生活に取り組み、それをよりよいものに発展させていく過程に（教師が）参加・関与していくこと』であるとされている。つまり、生活指導は子どもと教師という二つの主体からなり、その過程は相互応答として展開されるものであるとされている」（「終章 生活指導とは何か」P262）

③「生活指導とは、人間の行為・行動の指導ならびに行為・行動に直接的にかかわるかぎりにおいて、その認識や要求を指導することをとおして、民主的人格に寄与することを目的とする教育活動である」（『学級集団づくり入門 第二版』1971年P18）（下線は藤本）

①と②の定義は③をベースに発展させたものととらえることができる。「活動（行為・行動）の指導」は3つの定義の共通項であるが、「ものの見方の指導」や「ケアと対話」の要素が①と②には付け加わる。この3つの要素を、竹内論文（「指導の基盤としてのケアと対話」以下「ケアと対話」）で詳しく見ながら、それらが渡部実践から読み取れることを論じたい。

2. いま生活指導実践に必要な3つの要素

（1）「ものの見方」を発展させること

渡部はIとHのトラブルについての二人の見え方を、生徒たちが書いたことを整理しながら話す。Iはつねに体育館のドアには神経をとがらせており、毎回Hが注意を受けていたことにいら立っていた。HはIの高圧的な態度を嫌がった。同じトラブルでも、人によって注1見え方が違うことに生徒たちは気づく。そして次のような話し合いによって、その注1見方を発展させている。

I 「Hさ、バイトやめた時上司に文句言ったんでしょ」

H 「お前みたいなウザい奴の下では働く気はない…って、店長を怒鳴りつけた」

B 「お前はないかも」

渡部 「はたらく＝端楽」と板書。「はたらくとは端を楽にすることだよ」

I 「なるほどね（立ち上がり興奮気味）」「友だちつくるといいよ」「Bは電車賃使って応

援に来てくれる」「Hも自分から動いて喜ばせてやりたいと思える友だちつくれよ」
H「うーん」(渡部翔子レポート P2L61～P3L33)

Iの生きている世界とものの見方が実体験をもとに語られ、Hはそこに共感したのだろう。竹内は「ケアと対話」の中で「ものの見方」について次のように述べている。引用の〔 〕、下線、傍点は藤本。

「^{注2} そうした相互応答が『対話』なのである。人は、こうした自己と他者との〔対話〕、また私と自己との対話〔新たな自分をつくり出すための私ともう一人の自分（自己）との対話〕を通じて、他者とともに生きてあるところの_{((a))}世界を意味あるものとして構成していくことができるのである。対話は、_{((b))}自己と他者をつなぎ、社会を編み上げるだけでなく、生きるに値する世界を他者とともに創造する。そして、こうした対話をつうじて、人（生徒も教師もふくめて）は、…世界に意識的に参加・関与していくことができるようになるのだ。」
(P98L7～L12)

「_{((a))}世界を意味あるものとして構成していく」とは、世界を意味づけることであり「(世界に対する)ものの見方」を発展させるということだろう。

「世界を意味あるものとして構成していく」とことと、「_{((b))}自己と他者をつなぎ、社会を編み上げる」ことは、別のことであることが、「だけでなく」という表現からわかる。

「世界」とは「自分が認識している人間社会の全体。人の生活する環境。世間。世の中。」(デジタル大辞泉)と言われている。つまり「社会(他者との関係性)」よりも広い概念であり、「認識」の要素が加わる。

渡部の働きかけによって生まれた生徒たちの「話し合い(相互応答・対話)」によって、Iの生きている「世界(大好きな友達のために動くことが苦ではない)」と、Hが生きてきた「世界(小中といじめられてきた。友達とご飯を一緒に食べたこともない、父親は暴力的)」、そして、それぞれの生きている世界が生み出すものの見方(I「友だちのために自分から動く」。H「やられたらやり返す。高圧的な態度への嫌悪」)が浮き彫りになる。

これは世界を言葉によって構成していくこと(語ること・ナラティブ)であり、他者とつながることとは別のことだ。

(2)「活動(行為・行動)」を中心に据えること

①成長の決定的要因としての「活動(行為・行動)」

活動(行為・行動)が伴ってはじめて人は成長する。Hの成長を決定的にしたのは修学旅行中の彼自身の「行動」である。

生活指導運動は、自分のなかの人間的欲求が何かを探究・学習し、それをもとに自己を実現させていく「学習法的生活指導」から、社会的実践(行為・行動)の過程での訓練こそが、人が成長するための決定的要因だとする「訓練論的生活指導」へと、生活指導とらえ直してきた(Ⅰの③の実線と波線)。注3

②「活動（行為・行動）」を前提として「話し合い（相互応答・対話）」が始まる

渡部実践での修学旅行前の「話し合い」は、IとHのトラブルという「行為」について、このままでは修学旅行という「活動」がうまくいかないのではないかという心配から設定されたものである。話し合いのための話し合いではなく「活動（行為・行動）」をめぐる話し合いである。

「活動（行為・行動）」を実践の前提に置くのではなく、話し合い自体を実践の中心としてしまうと、話し合いが問題を「外在化」するものとならず、「内在化」し、問題を内に求め、頑張りを求めるものとなりがちである。^{注4}

③「活動（行為・行動）」と「（活動を前提とした）話し合い」が、生徒同士の「関係性」を生み出す

「活動（行為・行動）」は関係性を生み出す。修学旅行という活動のなかで、友だちのいなかったHが、一緒に階段をかけあがるなど、Dとの関係性（結びつきやつながり）を深めている（219号P13下段）。^{注5}

また、IとHのトラブルをめぐる「話し合い」そのものによっても、Hとクラスのメンバーとの関係性が深まっていく。それはHの「クラスの人たちとこういう風に話し合えたのは初めて……なんか、涙が出ちゃいます」（レポートP3L46～）ということばからも推測される（「対話は、自己と他者をつなぎ、社会を編み上げる…」）。

（3）ケアによって「話し合い（相互応答・対話）」を再生すること

渡部が、IとHのトラブルをめぐる話し合いができたのは、渡部にIとHの思いを汲もうとする姿勢があったからだろう。「思いを汲む」ことは「気にかける」「気遣う」（「ケアと対話」P95後ろから1行目）と同義であるとするならば、それはケアと行うことができる。さらに渡部は、国語表現の時間に生徒たちにトラブルを見たときの感情を書かせ、その時々に取り出した他者の感情を時系列で書き出させる。つまり子どもたちにも他者の思い（感情）を汲ませようとする。そしてケアを出発点として話し合い（相互応答・対話）が始まる。

なぜケアする（思いを汲む）ことが「話し合い（相互応答・対話）」を引き起こすのか？ 竹内は言う。

「^{注6}ケアは…他者の呼びかけに応答することである。その呼びかけと応答の関係性を取り結ばれるとき、応答されるものの側〔例えばHやI〕に『私がここにいる』という存在の重みを感じられ、『私』という意識が当人〔HやI〕の中に育まれ、『私』は自分自身の要求と必要を意識することができるようになる。それにつれて自己と他者と世界に対する基本的信頼が当人のもとに帰ってくる。（「ケアと対話」P96 L10～L15）

渡部は、IやHに、呼びかけられていると感じ、話し合いの場を設定することで応答したと言えるのではないかと。また生徒たちも他の生徒の感情を読み取ることで、自分以外の生徒から呼びかけられていると感じたのではないかと。とりわけ普段はフードとイヤホンで外界からの刺激を遮断しているSは、イライラしているHや、トラブルに戸惑うTから、自分が呼びかけられていると感じたのであろう。シートに誰よりも書き込んでいる。^{注7}

生徒による他の生徒の感情の読み取りは、読み上げられることで、他の生徒たちへの応答となり、応答された一人ひとりに「私」という意識が育まれ、それがクラスの話し合いの原基（大もと）となったのだろう。

竹内は続けて次のように言う。

「このような呼びかけと応答からなるケアの関係が原基となって、社会的つながり〔他者との関係性〕が取り結ばれ、さまざまな社会的活動（本稿にかかわって言えば、指導と討議〔話し合い〕）が展開される社会的地平が再生され、ひろがっていく。」（「ケアと対話」P96 L16～P97L1）

このように見ていくと、渡部の実践が目指したことは、ケア（呼びかけに応答すること）によって「社会的つながり（他者との関係性）」と「話し合い（相互応答・対話）」を再生することではないか。渡部が「大体、揉めるときはコミュニケーション不足なんだよね」と述べている（219号P9下段）ように、それは、コミュニケーションをつくることではないか。「ケア」と「話し合い（相互応答・対話）」はその具体化である。

このようにして「話し合い（相互応答・対話）」はケアを原基として再生される必要があるのだろう。

そして、そのような「話し合い（相互応答・対話）」は、生徒理解・相互理解のためというよりも、（1）で述べたように、生徒たちのものの見方を発展させ、「世界を意味あるものとして構成」するためになされ、また（2）で述べたように、「話し合い（相互応答・対話）」それ自体が目的ではなく、それはトラブルや修学旅行という「活動（行為・行動）」につながるものでなければならないだろう。

なぜならば、そのような「話し合い（相互応答・対話）」でなければ、子どもたちが「意識的な生活主体として自分（たち）の生活に取り組み、それ〔生活〕をよりよいものに発展させていく」（1の②）ことができないからである。つまり生活指導にならないからである。

注1 見え方・見方はviewと訳すことができるだろう。それは「子どもの権利条約の意見表明権 the right to express a view」ともつながる）。

注2 他者を所有し支配するのではなく、他者の他者性を認めること、他者は自分とは違う主体性を持った存在であることを認めることで、成立する相互応答のこと

注3 「学習法的生活指導は…自己そのものを学習させ、自分の自由意志とは何か、自分の人間的生命とはなにかを探究させ、そして彼自身の生活に自由意志または人間的欲求を表現させようとする。すなわち、それは子どもの生きかたが自己実現の生き方になるように指導しようとする」「訓練論的生活指導は…子どもの自由意志や人間的欲求は子どもが社会的実践主体として社会生活に参加し、社会的諸力の対立・抗争・統制の過程で訓練されていってこそはじめて価値のあるものとなっていくととらえる」（「生活指導の二つの系譜」（1969年）『竹内常一 教育のしごと第1巻』P21）

注4 「『外在化』とは、文字どおり何かを外部に位置づけるということであり、その反対は『内在化』である」「内在化は、結局のところ自分が悪いということになるから、な

んらかの仕方では自分を变える以外に手はない。一方、外在化は、外部が悪いのだから、外部に変わってもらう、あるいは、外部を変えていくという方向に行かざるをえない。」

(『物語としてのケア』P71)

注5 「集団づくり」という言葉が使われる場合、このように「活動(行為・行動)」や「(活動を前提とした)話し合い・対話」が生徒同士の関係性を生み出しているという側面を指して使われているように思われる。しかしそれは生活指導の一側面に過ぎない。

注6 「呼びかけ」とは他者に呼びかけることではない。なぜなら他者に呼びかけることはケアではないからである。全生研基調のP65 下段の竜の「なんで先生はそれがOKなんですか」を「竜の教師への呼びかけ」としているが、それは竜の教師への訴えではあるがケアではないだろう。

注7 普段外界から遮断しているSがシートに誰よりも生徒たちの心の動きを読み取ったのは、何かに呼びかけられていると感じたからではないか？

シートの書き込みには「Tは『止めないと!』と思っていたと思う」とSだけが書いていることから困惑するTの表情に呼びかけられていると感じたのではない。

また渡部によると1年生のときにHが書いた、小中でいじめられていたという作文に一番強く反応したのは、Sであり、自身も複雑な家庭環境で育っているSが、このトラブルの時にイライラしているHから呼びかけられていると感じたのかもしれない。

同時に、Sは、このトラブルをおもしろがり爆笑している。それはSが自分自身に呼びかけられ、Hと自分を重ね合わせ、自身をあざ笑っているのかもしれない。

指定研究論文 添付

竹内常一「指導の基盤としてのケアと対話」(『新・生活指導の理論』) 2014年

〃「生活指導とは何か」(『新・生活指導の理論』「終章 生活指導とは何か」P257～270)

指定実践記録 添付

渡部翔子「関係に傷ついた生徒がHR、授業、行事で協働するとき -見え方の違いを越えて」

参考実践記録

渡部翔子「見え方の違いを超え、ひらかれていく」(『高校生活指導』219号)

参考研究論文

藤本幹人 見波由美子 望月一枝 森俊二 内田理 渡辺大輔

「相互応答と共同行動によるオルタナティブ・ストーリーの生成とエンパワーメント
～渡部実践の読み解きを中心に～」(『生活指導研究』NO41) 2024年

竹内常一「生活指導の二つの系譜」1969年(『竹内常一教育のしごと』第1巻)

学級集団づくり入門第二版の第1章 1971年

竹内常一「ものの見方・感じ方・考え方の指導」1988年(『竹内常一教育のしごと』第5巻)